

審査の結果の要旨

氏名 山路 茜

本論文は、中学校数学科授業における、援助要請から生起する相互作用過程の特徴を教室の状況に位置づけて検討し、援助要請が有効に働く互惠的学習を保障する学級の相互作用過程のメカニズムを検証した研究である。論文は、全5部8章から構成されている。

第Ⅰ部第1章では、援助要請に関する先行研究を概括し、教科固有性、援助要請にもとづく相互作用、教師の役割の検討が必要であることを指摘し、7つの具体的研究課題を導出している。続く第2章では、上記研究課題検討の方法論として、参与観察および談話分析の方法、研究協力教師および学級の文脈等を記述し、中等教育学校1学年25回、2学年26回計51回の数学授業観察とその授業記録にもとづく研究であることを述べている。

第Ⅱ部では、時間経過に伴う援助要請にもとづく相互作用過程の変化を、生徒個人に焦点をあて分析している。第3章では、16時間の授業における1名の生徒記録から、援助要請と聴く行為に着目して数学の理解深化過程を質的に検討し、聴くことや援助要請行為の各個別行為の質の良悪ではなく、それらが相補的状況依存的に機能する点を明らかにしている。第4章では、2授業での小グループ内問題解決過程について、援助要請対象と要請内容の分析から、援助要請者のみならず被要請者にも要請が機能し、解決者の出現に伴い、要請内容が他者の解法や意図、既習内容へと移るという相互作用の変化を同定している。

第Ⅲ部では、課題構造や話題の違いによる相互作用の相違を、小グループにおける生徒の関係性に焦点をあて分析している。第5章では、6時間の授業で提示された課題を正しく答えを得ることが目指された《解決志向課題》と、なぜその解き方がよいかを探究することが目指された《意味理解志向課題》の2課題に分類し、1グループの談話記録を生徒間の援助関係に着目し分析している。その結果、課題により各生徒の援助被援助のバランスや種類の出現率が異なることから、生徒間の関係性が課題構造に応じて動的に変化することを示している。第6章では、前章で得られた相互作用の変化を、[手続き教示型]、[知識伝達型]、[検証型]、[解釈型]の4タイプの相互作用として発話連鎖に着目して分析し、[手続き教示型]、[知識伝達型]では、援助要請は答えや断片的知識を得るための機能を持ち、水準が変わることのない一問一答の短い対話ターンの反復という特徴があるのに対し、[検証型]、[解釈型]では、誤りやわからない状態を開示する援助要請により、必要な援助が質問と説明が修正されながらなされる特徴があることを描出している。そして第Ⅳ部第7章では、教師に焦点を当て、2年間42時間の質問傾向の時期的変化、代表事例における発話連鎖の質的分析と教師への回顧面接から、答えを正しく導けなかった生徒に対する理由への関心の保障等の配慮という指導意図と、答えと共に理由を考えられることが数学学習であるという信念に由来し、教師の発話が時期と共に変化したことを明らかにしている。

そして第Ⅴ部第8章では、上記研究を総括し、中学校数学科での援助要請とそれに付随する相互作用過程に影響を及ぼす要因の整理とメカニズムモデルを提示し、その意義と今後の課題を論じている。

本論文は、特定学級を長期間にわたって観察し、その精緻な分析を通して、数学教科固有の援助要請過程の力動や時期的変化を関係論的に明らかにした点で、今後の教育実践研究に影響をあたえうる質の研究であると高く評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあると判断された。